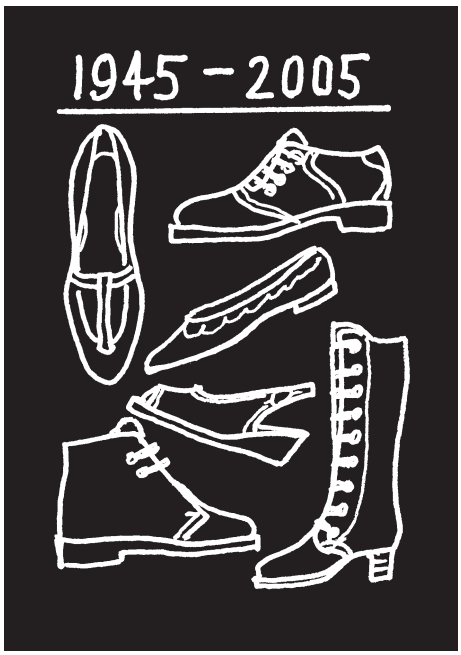
靴のデザインにみる戦後史 ⑦

文・イラスト　神奈川県企業博物館連絡会特別会員　**福　原　一　郎**

2000年（平成12年）文明開化の明治３年（1870年）に日本で初めて西洋式靴工場が出来てから「130年」に当り、日本靴連盟と東靴協会の主催による靴業の歴史を物語る資料展が開催された。

20世紀には各種の製靴技術が発展し、さまざまな靴のデザインが数多く生まれた。

2001年（平成13年）90年代に流行した“厚底靴”は21世紀になって影をひそめ、室内履から進展したミュールやバックレス・サンダルがパンプスに代って街の中で履かれるようになった。



2002年（平成14年）履き心地を優先してつくられるコンフォート・シューズも広く普及し、スタイリッシュなものが要求されてきた。また、ユニバーサル・デザインといわれる着脱や歩行も楽で足にやさしい靴も考えられるようになった。そして、通気性、撥水性などに優れた甲材や、ノンスリップ底などの機能素材も開発が進んで、ウォーキング・シューズやトレッキング・シューズなどがつくられて一般にも履かれている。

2003年（平成15年）婦人靴の爪先は、スクエアートウから細めのポインテッドトウが再び注目された。ヒールの形状も側面からは細く、後からは太く見える化粧面が横に広いものでレトロ感覚のハイヒールがつくられている。

2004年（平成16年）アテネでオリンピックが開催され、日本選手の活躍もめざましく優勝選手のスポーツ靴が話題になった。街でおしゃれに履くスニーカーも、カラフルでウェッジヒールのドレスアップ用のものも出来た。甲に革を用いたスニーカー調のデザインの紳士用もつくられ、スーツに用いられるようになった。

2005年（平成17年）日本が敗戦から60年を迎えた。愛知県では日本国際博覧会「愛・地球博」が世界の国々の参加で開かれている。靴は外国にそのルーツがあるもので、伝統的な民族靴からとり入れられたデザインは数多くある。2005－2006年秋・冬のコレクションにもウエスタン・ブーツが用いられたり、1920年代のアール・デコ調のアンクルストラップのついたパンプスや、古代ギリシャのサンダルを想わせるような革紐を編んだフラット・サンダル、また、北アメリカ先住民のはきもののような底のうすい軽快なスリッポンなどさまざまな靴が見られる。

戦後60年の靴デザインは、カジュアル化の方向に進んできたが、一方若い人たちの中には、伝統的な手縫いの技術によるオーダーメードの高級革靴にこだわりを持って、服装とのコーディネートも考えて足もとに投資する新しいライフスタイルも芽生えてきた。　　完

2000—2005

ミュール
バックレス・サンダル
トレッキング・シューズ
アンクル・ストラップ
ウエスタン・ブーツ
スニーカー調の紳士革靴
ドレスアップ用
スニーカー
高級手縫の紳士靴
フラット・サンダル
軽快なスリッポン